

研究成果の紹介

加工・業務用レタスに対応した大玉生産技術

近年、増加するレタスの加工・業務用需要に対応可能な、冬期における大玉生産のための栽培様式について検討した。その結果、畝幅150cm、株間30cmの中型3条トンネルまたは畝幅180cm、株間30cmの大型4条トンネルで栽培すれば、レタスは大玉かつ多収となった。

内容

淡路島でのレタス栽培は他産地とは異なり、図1のように、畝幅130cm、条間30cm、株間26cmの2条植え又は3条植えが一般的で、特に生育が停滞する冬穫り栽培については2条植えを推奨している。しかし、加工・業務用に対応した700g以上の大玉を生産する場合は、より保温効果が高く、栽植本数も増やせる大型のトンネルにする必要があると考えられる。そこで、マルチャー等の機械は変えずに畝幅を変更し、当地での最適なトンネルの大きさ、条数、株間を検討した(図1)。

試験は淡路農業技術センターの水田跡圃場(灰色低地土)で行い、品種は「クラウドブレイク」(シンジェンタシード)を供試した。耕種概要及び試験区の構成を表に示した。

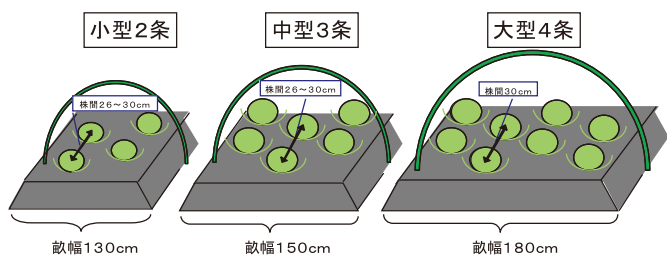


図1 トンネルの大きさ及び条数の違い

表 試験区の構成及び耕種概要

試験区	条数	ビニール幅 (cm)	畝幅 (cm)	条間 (cm)	株間 (cm)	栽植本数 (本/10a)
大型4条区	4	230	180	30	30	7,400
中型3条30cm区	3	185	150	30	30	6,600
中型3条26cm区	3	185	150	30	26	7,700
小型2条30cm区	2	150	130	30	30	5,100
小型2条26cm区	2	150	130	30	26	5,900

播種: 2015年9月22日(200穴セルトレイ育苗)、定植: 10月19日、
 施肥量: N:P₂O₅:K₂O=32:16:18(kg/10a)、トンネル被覆: 12月10日~収穫まで、
 収穫: 2016年1月6日

その結果、球重は中型3条30cm区が741gで最大となり、大玉であった(写真)。収量は大型4条区の5.2t/10aで最大となった(図2)。また、肥大性の異なる他品種においても、試験結果は同様の傾向であった(データ略)。

以上により、実需者の求める700g以上の大玉が確保でき、多収となる栽培様式は中型3条30cm区と大型4条区であった。

今後の方針

栽植本数が少なく、導入コストが最も低かった中型3条30cm区の栽培様式について栽培層への採用を検討する。

中野 伸一 (淡路 農業部)

(問い合わせ先 電話: 0799-42-4880)



写真 栽培様式の違いと球の大きさ

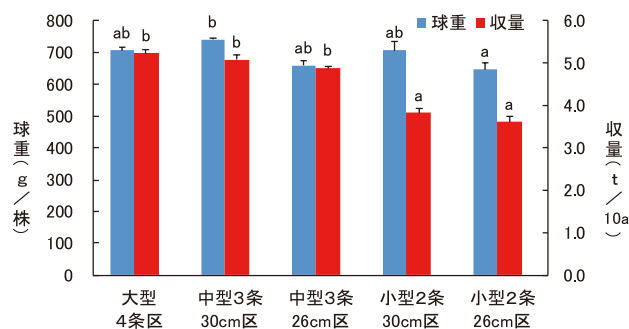


図2 条数及び株間の違いによる冬穫りレタスの球重と収量 (品種: クラウドブレイク)

※各同色バーの異符号間には Tukey-kramer の多重検定で 5%水準の有意差あり
 ※エラーバーは標準誤差を示す (n=5)